

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：35401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02577

研究課題名（和文）音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法

研究課題名（英文）Curriculum and Teaching Methods for the Development of Musical Sense and Musical Abilities underlying Qualities and Abilities inherent in the Department of Music

研究代表者

三村 真弓（MIMURA, Mayumi）

エリザベト音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：00372764

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間全体で行った多数の研究によって、音楽科固有の資質・能力は、音楽的感性、即興性、創造性等であることがわかった。音楽科固有の資質・能力の基礎となるのは、音楽的感覚、聴覚力、内的聴覚力、音楽的記憶力等である。それらを育むためには、指導者が重要な音楽教育法の目的や内容や指導法を学ぶことが必須である。それに基づいてカリキュラムを開発し、指導者が正確な音楽活動のモデルを示しつつも、子どもの主体性・自主性を尊重し、楽しい遊びを通して音楽活動を行うことが重要である。また、子どものすべての音楽活動を認め、褒めることによって、子どもの人間としての成長にも繋がることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教科横断的資質・能力と音楽科固有の資質・能力との関連性に関して、音楽科固有の資質・能力を育成するとそれが教科横断的資質・能力に繋がることが明らかとなった。これは各教科固有の資質・能力が教科横断的資質・能力に果たす役割を明らかにしたといえる。

音楽教育において、子どもの主体性・自主性を保持しつつ楽しい音楽活動を通して確実に音楽的感覚や音楽能力を育てれば、それを基に音楽的感性、即興性、創造性が育成されていき、さらに音楽活動を通して自己存在感・自己肯定感、他者受容感、自己決定感が育ち、人間教育としての意義もあることが明らかとなった。これは就学前教育・学校教育において音楽が果たす役割と意義といえる。

研究成果の概要（英文）：Numerous studies conducted throughout the study period revealed that the qualities and abilities inherent in the Department of Music are musical sensitivity, improvisation, and creativity. The foundations of the qualities and abilities inherent in the Department of Music are musical sensibility, auditory skills, internal auditory skills, and musical memory. In order to nurture them, it is essential for educators to learn the purpose and content of important music education and teaching methods. On this basis, it is vital for educators to develop a musical curriculum and exhibit an accurate model of musical activities while acknowledging children's independence and initiative and engaging in musical activities through enjoyable playing. Additionally, it was proved that recognizing and praising children's various musical activities leads to children's personal growth.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽科固有の資質・能力 音楽的感覚 音楽能力 音楽的感性 即興性・創造性 自己存在感・自己肯定感 他者受容感 自己決定感

1 . 研究開始当初の背景

昨今、21 世紀に求められる資質・能力を定義し、それを基盤にしたナショナルカリキュラムを開発する取り組みが盛んに行われていた。このような方向性の中で、我が国の学習指導要領でも、教科横断的に育む 3 つの資質・能力として、「生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」が提示された。このような学術的背景の中で、第 1 の課題は、音楽科で育成を目指している資質・能力が、上記の教科横断的に育む 3 つの資質・能力と本当に繋がるのかということである。第 2 の課題は、学習指導要領（音楽）に書かれている内容に具体性がなく、音楽科固有の資質・能力育成の実現性が低いことである。すなわち、音楽科固有の資質・能力を育むために必要な音楽的感覚や音楽能力を明確にし、その指導法を開発する必要がある。

2 . 研究の目的

本研究の目的は、21 世紀の社会を生き抜いていくために必要な資質・能力に繋がる音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚や音楽能力を育成する系統的な音楽カリキュラムと、その指導法を明らかにすることである。これによって、音楽科固有の資質・能力が育成されたのか、教科横断的（汎用的）に育む資質・能力の育成に繋がったのかを検証したい。

3 . 研究の方法

第 1 に、教科横断的な資質・能力と音楽科固有の資質・能力との関係性を、文科省研究開発指定校のカリキュラムや実践例から分析し、独自の教科横断的な資質・能力と教科との関連性から音楽科固有の資質・能力をどのように捉え、育成しているのかを明らかにする。第 2 に、就学前教育や学校教育における優れた音楽活動の実践調査から、音楽活動や指導の特徴、子どもの主体性・自主性を尊重しつつも音楽的感覚や音楽能力が育まれたかを明らかにする。第 3 に、優れた音楽教育法の事例等から特徴と成果を明らかにし、発達に応じた系統的な音楽カリキュラムと指導法はどのようなものかを解明する。また、子どもにとって楽しい音楽遊びをする中で、着実に音楽的感覚や音楽能力を育成するにはどのような要件が必要なのかを明らかにする。第 4 に、優れた音楽教育法を活かした実践を行い、その効果を検証する。

4 . 研究成果

(1) 教科横断的（汎用的）な資質・能力と音楽科固有の資質・能力との関連性

三村真弓・吉富功修・岡田知也・長澤希・梅比良麻子・松下友紀（2019）「汎用的な資質・能力と音楽科固有の資質・能力との関連性 - 文部科学省研究開発指定校の取り組みを中心に - 」『音楽文化教育学研究紀要』No.31 , pp. 5-14

本研究は、汎用的な資質・能力を育むことを研究課題としている複数の文部科学省研究開発指定校において、汎用的な資質・能力と音楽科固有の資質・能力とをどのように関連付けているのかを明らかにすることを研究目的とした。いずれの研究校においても、提示された音楽科の資質・能力は教科の本質に根付いており、音楽科は汎用的資質・能力育成の手段とはなっていない。どの教育課程においても、新領域・新教科と各教科における学習方法に共通性が見られる。すなわち、汎用的資質・能力の育成のための学習方法が確立されるとそれが各教科の学習に活き、各教科独自の学習方法が深められるとそれが汎用的資質・能力の育成にも生きてくるのである。したがって、両者を繋ぐ根幹となるのは学習方法の開発といえる。

三村真弓（2020）「主体的な創造活動を通して、音楽に対する他者の思いや意図に共感する態度を育てる音楽科授業」『学校教育』No.1239 , pp.38-43

本研究は、教科の授業を通して教科横断的な資質・能力がどのように育成されるのかを明らかにすることを研究目的とした。研究対象は広島大学附属小学校であり、教科横断的な資質・能力は、「生きるために必要となる知識・技能、文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力、アイデンティティをもち、異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度である。分析対象である鑑賞の授業において、表現活動や創作活動を取り入れることによって音楽の諸要素や曲の構造を理解する知識・技能が獲得され、それをもとに思考・判断する力も育成された。それだけではなく、教科横断的な資質・能力である「アイデンティティをもち、異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度」が育成されたことも事実である。

(2) 就学前教育及び学校教育における優れた音楽活動の実践事例の特徴と効果

三村真弓・金奎道・前田克治・堀内知佐乃・ジュンス(p)（2021）「音楽科の本質を追究する『音楽づくり』の有効性 - 高知大学教育学部附属小学校の取り組みに着目して - 」『音楽の授業づくりジャーナル』第 5 号 , pp.72-86

本研究は、高知大学教育学部附属小学校音楽科の『音楽づくりと鑑賞のカリキュラム』の特徴や意義を、「音楽づくり」の題材事例から分析することによって、カリキュラムの系統性および子どもの音楽的成長を明らかにすることを研究目的とした。附属小はカリキュラムに基づいた「音楽づくり」を系統的に行うことによって、創作 知識・技能 感性・美的価値観を育んでい

る。「音楽づくり」によって成長した子どもの姿からは、即興性、創作力、音楽との深いつながりだけでなく、自己存在感・肯定感、他者受容感、自己決定感が感じられる。音楽科本質の資質・能力だけでなく、教科横断的な資質・能力も追究しているのである。

三村真弓・坪能由紀子・金奎道・堀内知佐乃(2022)「学校教育における音楽の役割と意義 その1 - 高知大学教育学部附属小学校の『音楽づくり』に着目して - 」『音楽教育学』第51巻第2号, pp.80-81

本研究は、音楽科授業における創作活動に焦点を当て、高知大学教育学部附属小学校の「音楽づくり」に着目し、「音楽づくり」が果たす役割と意義を明らかにすることを研究目的とした。「音楽づくり」の特徴と役割は、創造性の育成、即興性の重視、多様な音楽様式、つくることと聴くことの相関、コミュニケーション力の育成、誰もが参加できること、ルール破りと自由な表現等である。すなわち、「音楽づくり」は知識・技能の獲得が目的ではなく、創造性の育成を目指すものである。それによって、知的好奇心が生まれ、豊かな創造性や感性が育まれる。また、協働作業や他者評価によって、コミュニケーション力も獲得される。中でも、全ての子どもの発想・提案を認めることから、国連のSDGsの「誰一人取り残さない」とも繋がるといえる。「音楽づくり」は、未来を生き抜くために意義のある音楽活動なのである。

坪能由紀子・金奎道・松本進乃助・三村真弓・寺本妙子(2023)「学校教育における音楽科の役割と意義 その2 - SDGsと『誰にでもできる音楽づくり』 - 」『音楽教育学』第52巻第2号, pp.86-87

本研究は、特別支援学校における「誰にでもできる音楽づくり」の実践分析を行うことによって、SDGsにどのように関連するのかを研究目的とした。金は、創作活動において生徒の創造性が発揮できる環境づくり、生徒が持つ創造性を刺激し、「わかった・できた」という体験を積み重ねることが、特別支援教育を展開する上で重要な要素であることを明らかにした。松本は、生徒が自ら学びをデザインすることを「創造的な楽器づくり」によって実現し、実践から「教師と生徒のインクルーシブな協働」という両者の新たな関わり方を明らかにした。三村は、「音楽づくり」の授業分析を通して、活動や教師の指導の特徴、生徒の成長を考察し、特別支援学校における「誰にでもできる音楽づくり」は、SDGsの目指す「誰一人取り残さない」を達成したことを明らかにした。寺本は、インクルーシブなTASモデルを提案し、音楽体験の共有を通じた主体性と創造性の可能性について考察した。このような音楽体験の共有は、生徒の主体性や、Error freeというステレオタイプからの解放による創造性、協働を通じた「つながり」の体験による持続可能な人と人との関係性の促進に寄与することを明らかにした。

三村真弓(2023)「特別支援学校における『誰にでもできる音楽づくり』の特徴と役割 - 東京都立葛飾特別支援学校(知的障害)高等部の山本恵美教師の取り組みを中心に - 」『音楽の授業づくりジャーナル』No.9(採用決定)

本研究は、特別支援学校高等部の授業分析を通して、活動や教師の指導の特徴、生徒の成長等を考察し、特別支援学校における「誰にでもできる音楽づくり」の特徴と役割を明らかにすることを研究目的とした。特別支援学校の生徒が抱える課題は、他者との対話や他者とのつながりが難しい、他者の考えを受け入れるのが難しい、間違えたりできないのが恐ろしい、自信がない、自己主張したり、自己表現することが難しい等、いろいろと存在する。「誰にでもできる音楽づくり」には求められる正解がなく、すべてが認められることによって、自信が持てるようになり、自己肯定感や自己決定感が生じる。自由に発想したり表現したりできるようになることによって、積極性、主体性、自主性、創造性が育まれる。音や音楽をとおした様々な他者との対話が生じることによって他者の音楽表現を受け入れるようになり、アレンジして自分なりの音楽表現を作り上げることによって、他者受容感、自己決定感が生まれる。流れる音楽に合わせて、即興表現を行うことによって音楽との対話が生じ、音楽の楽しさ、音楽的感覚の成長、即興性、創造性が生まれるのである。本研究によって、特別支援学校における「誰にでもできる音楽づくり」が、SDGsの目指す「全ての人々が能力を伸ばし発揮でき、誰ひとり取り残されることなく生きがいを感じることをできる包摂的な社会を目指す。」の目標に到達できたことが明らかとなった。

(3) 優れた音楽教育法の特徴と成果

三村真弓(2018)「岐阜県古川小学校における『ふしづくりの教育』の教育課程に関する研究 - 二本立て方式に着目して - 」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第67号, pp.317-326

本研究は、「ふしづくりの教育」の教育課程の特徴を明らかにすることを研究の目的とした。子どもの主体的で創造的な学習態度を育成するという「ふしづくりの教育」の教育方針が、「ふしづくりの教育」の二本立て方式におけるA活動とB活動に反映しており、子どもの能力差に応じた活動を繰り返し行うことによって、主体性を保持しつつ、子ども個々の音楽的感覚、聴取力、音楽的記憶力等の基礎的な音楽能力を確実に育成することができた。これらはすべて子どもの自主性・主体性、及び人との連携・協働のなかで行われた。「ふしづくりの教育」の特徴である、自主性の尊重、自尊感情の高まり、協働による達成感や感動等は、音楽を通してでないとい味わえない音楽科特有の自己存在感、他者受容感、自己決定感であるといえる。これによって、「ふしづくりの教育」は、子どもにとって感動的で意義のある音楽科授業となったのである。

三村真弓(2020)「質の高い音楽科教育に必要なものとは - 岐阜県古川小学校の『ふしづくりの教育』の特徴と意義に着目して - 」『学校教育』No.1238, pp.22-29

本研究は、質の高い音楽科教育として「ふしづくりの教育」の音楽科授業実践に着目し、特徴と意義を明らかにすることを研究の目的とした。「ふしづくりの教育」の音楽教育としての意義は、誰にでも指導することが可能な段階的・系統的カリキュラムとふしづくりの指導法を確立したこと、ふしづくりと教科書教材の学習という2つの活動を有機的に組み合わせた二本立て方式を用い、その有効性を得たこと、子どもの音楽的感覚や音楽能力の基盤形成に有益な活動を数多く生み出したことである。「ふしづくりの教育」の人間教育としての意義は、校長の「民主的な学級経営」による子どもの自主性の尊重、1人ひとりに歌唱・演奏・発言の機会が保障され、ソロや個人発言が教師や友だちに受け入れられることによって、自尊感情を高めることができたこと、グループ活動の重視によって音楽によるコミュニケーションをとることができ、グループで作品を作り発表することによって協働による達成感や感動が得られ、音楽でしか味わえない独自の自己存在感・自己有能感、他者受容感、自己決定感が生じたことである。これらによって、子どもたちの社会的な自己実現が図られ、自己指導能力が育成されたといえる。

三村真弓・吉富功修(2019)「高山短期大学附属幼稚園における『ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム』に関する研究 - 幼稚園開設当時の取り組みに着目して - 」『教育学研究紀要 (CD-ROM版)』第64巻, pp. 340-345

本研究は、「ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム」が導入された昭和55年の高山短期大学附属幼稚園の取り組みに焦点を当て、特徴を明らかにすることを研究の目的とした。「ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム」の特徴として、多彩な遊びを中心とした活動であること、個と個、個と集団、集団と集団など、人とのやりとりを重視していること、基礎的な音楽能力を、多数の遊びを通して音楽活動を何度も実体験することによって獲得させていくこと、いろいろな言葉を使った即興的なふしづくりをすることによって実生活と繋がった主体的な活動となること、段階的・系統的なカリキュラムであるが、子どもの能力に合わせて柔軟に実施すること、幼児教育と小学校の接続を意識したカリキュラム及び実践であること等が明らかとなった。人間教育としての役割を果たした「ふしづくりの教育」の特徴である、子ども自らが個人的につくりあげる即興表現を中心とすること(自己存在感・自己決定感に繋がるもの)、個と個の関わりや個と集団の関わりを大事にすること(他者受容感に繋がるもの)等は、「ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム」でも重要な位置づけとなっている。

三村真弓・吉富功修(2022)「高山短期大学附属幼稚園における『ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム』の特徴と意義 - 昭和60年度から平成2年度に着目して - 」『教育学研究紀要 (CD-ROM版)』第67巻, pp.230-235

本研究は、高山短期大学附属幼稚園の昭和60年度から平成2年度を対象とし、「ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム」の特徴と意義を明らかにすることを研究目的とした。音楽リズム活動では、子どもの実態・能力に着目して目的や内容を設定し、子どもの生活体験に結びつく活動や、大好きなうたや物語を軸としたストーリーを取り入れることによって、子どもの興味・関心を引き寄せる。教師が気づきを引き出すような言葉掛けや活動のモデルを示すことによって、子どもに音楽的感覚や音楽能力や技能が育まれていく。また、教師から高く評価されることによって、自己の価値観の主張、他者の価値観の受容も生じる。ペア活動やグループ活動を通して、友だちとのコミュニケーション力が身につくだけでなく、集団活動に必要なルールを理解し守ることによって、社会性や協調性も育まれる。すなわち、「ふしづくりの教育」と同じく、「ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム」は、幼児教育において、非常に優れた音楽教育であると同時に、人間教育としての意義もあるといえる。

三村真弓(2022)「国吉光徳保育園における『ふしづくり』システムに基づいた音楽リズムを中心とした表現(音楽)の保育の特徴と意義」『エリザベト音楽大学研究紀要』XL, pp.41-54

本研究は、国吉光徳保育園における「ふしづくり」システムに基づいた音楽リズムを中心とした表現(音楽)の保育の特徴と意義を明らかにすることを研究目的とした。「ふしづくり」システムに基づいた音楽リズムあそびは、音楽の基礎能力を育むために単独で行うのではなく、ストーリー性のある保育活動の中に工夫して設定されており、子どもたちはごく自然にストーリーの中で楽しく意欲的に行動する。子どもの主体性を保持した音楽リズムあそびを通して、音楽的感覚、音楽能力、感性、創造性等が育成され、音楽教育としての意義がある。友だちと一緒にリズムによって遊ぶ楽しさを積み重ねていき、集団で活動する楽しさに気付いていく。表現(音楽)の保育を通して人間関係の構築が可能となり、子どもの人間としての成長にも繋がっている。国吉光徳保育園における「ふしづくり」システムに基づいた音楽リズムを中心とした表現(音楽)の保育は、音楽教育としての意義だけでなく、人間教育としての意義もあるといえる。

三村真弓(2021)「よこはまりズム研修会の『さくら・さくらんぼのリズムあそび』の特徴と成果 - 保育士の学びに着目して - 」『エリザベト音楽大学研究紀要』L, pp.41-52

本研究は、よこはまりズム研修会の「さくら・さくらんぼのリズムあそび」の特徴と成果、及び保育士がどのような学びをしているのかを明らかにすることを研究の目的とした。よこはまりズム研修会は、設立当初から斎藤公子の発達理論と実践を重視し、「さくら・さくらんぼのリズムあそび」に取り組んできた。しかし、子どもの姿から、どうしたら子どもが楽しめるかという課題に悩み、活動の工夫を行った。そこで重視するようになったのが、まず保育士自身が楽しむこと、指導しないで待ちの姿勢になること、子どもの活動を評価し具体的に褒めること等であった。子どもの主体性や楽しみ・喜びを重視しつつも、心身の発達を補助するためにはどうした

らいいのかに関して、保育士が理論や実践を確実に把握し、自分自身が正確な身体活動を行うことによって、子どもの活動の模範となる。また、保育士が子どもの活動の様子をしっかりと捉え、評価し、具体的に褒めることで、子どもの身体活動は良くなり、他の子どもにもそれが伝わる。よこはまりズム研修会では、保育士たちが、子どもから多くのことを学んでいった。これらによって保育士の意欲が高まり、子どもに対する見方・考え方が変容し、子どもに対応する力が育ったといえる。よこはまりズム研修会の取り組みは、子どもの心身の発達や音楽能力の育成にとどまらず、保育全体の質の向上にも寄与しているといえる。

三村真弓(2023)『よこはまりズム研修会の特徴 - 自主勉強会におけるリズム遊びに着目して - 』『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第 68 巻, pp.425-430

本研究は、よこはまりズム研修会の自主勉強会における学びの特徴を明らかにすることを研究の目的とした。よこはまりズム研修会は、設立当初から斎藤公子の理念やリズム遊びの正しい動き方を理解していたが、次第に子どもが楽しむということを優先するようになり、子どもの主体性・自主性を重視するようになっていった。そのためには、まず保育者たちが生命体の発達とリズム遊びとの関連性を理解した上で、リズム遊びの正しい動き方を学ぶことが大切である。その上で、正しい動き方を子どもに教えるのではなく、動き方の重要性を意識しながら保育者たち自身が魅力的な動き方を子どもたちに示すことによって、子どもたちは興味・関心を抱き、保育者の動き方を真似していく。子どもたちは主体的・自主的に楽しくリズム遊びに取り組みながらも、実体験を積み重ねることによって能力が身に付いていくのである。また、子ども自身を多くの視点から評価することによって自己肯定感を育むこともできる。

(4) 優れた音楽教育法の実践による効果の検証

松下友紀・吉富功修・三村真弓(2019)『特別支援学校(肢体不自由)高等部における『ふしづくりの教育』の実践 - 重複障害を有する生徒を対象とした音楽科授業での『わらべうたあそび』の検討を通して - 』『音楽文化教育学研究紀要』No.31, pp. 39-48

本研究は、「ふしづくりの教育」の「リズムにのったことばあそび」のわらべうたあそびを特別支援学校高等部の音楽科授業で継続的に行うことによって、生徒にどのような変化が見られたかを明らかにすることを研究目的とした。生徒に主体的にふしづくりをする様子が見られ、音楽能力の向上や人間としての成長が見られた。変化の要因は、わらべうたあそびが障害のある生徒にとってわかりやすく達成感を得られたこと、好きな言葉を使ってふしがつくれることの面白さ、即興的な遊びのもつ楽しさ、教師たちが生徒の表現を肯定的に受け止めていたことである。

吉富功修・三村真弓・福島さやか(2019)『春日市泉ヶ丘幼稚園における『ふしあそび』の実践 - 古川小学校「ふしづくりの教育」の指導法に着目して - 』『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第 64 巻, pp. 346-351

本研究は、「ふしづくりの教育」の初期段階の活動を「ふしあそび」と設定し、福岡県春日市泉ヶ丘幼稚園の協力を得て実践し、その特徴を明らかにすることを研究目的とした。2歳児クラスの「ふしあそび」の活動を通して、子どもは集中して聴くことによって音高を認識して模唱や応答唱ができるようになった。保育者は、子どもが歌声に関心をもつように絶えず注意し、称賛の言葉を適切に使用しており、子どもはとても嬉しそうな表情をしていた。

三村真弓・吉富功修・緒方満・大西潤一・中峯悠太(2020)『『ふしづくりの教育』の実践 - 広島市立戸坂小学校における『リズム学習』を中心として - 』『音楽文化教育学研究紀要』32 巻, pp.5-14

本研究は、「ふしづくりの教育」を現在の音楽科教育に効果的に導入するための実践的・実験的研究として、「ふしづくりの教育」のリズム活動によってどのような成果があるのかを検証することを研究の目的とした。研究対象は、広島市立戸坂小学校第3学年の全児童である。通常の音楽科授業に「ふしづくりの教育」による「リズム学習」を取り入れたことによって、聴取力、リズム感、読譜力・記譜力が向上した。したがって、「ふしづくりの音楽教育」の指導法は、現在の音楽科授業でも有為な成果をもたらすといえる。

(5) 研究成果のまとめ

教科横断的資質・能力の育成は重要ではあるが、各教科がそれを常に目標とすると教科は手段となる。まず各教科固有の資質・能力は何かを認識し、それを育成するためには何が必要となるのかを探究することが重要である。各教科固有の資質・能力の育成は教科横断的資質・能力の育成に貢献し、教科横断的資質・能力は各教科の学び方に貢献するだろう。

就学前教育や学校教育における音楽活動は、指導者が音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚や音楽能力の育成のためには何が必要なのかをしっかりと認識しつつも、学習者の主体性・自主性の保持を重視し、指導者自身がモデルを示すことによって学習者にヒントを与え、学習者の音楽活動の良い点を常に褒めることにより、学習者の音楽的感覚や音楽能力が成長すると共に、自己存在感・自己肯定感、自己決定感が生まれる。また、音楽活動を通して他者と繋がり、音楽的価値観の共有・発展が生じることによって、人間的成長も達成できるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 三村真弓・金奎道・前田克治・堀内知佐乃・ジュンス(p)	4. 巻 第5号
2. 論文標題 音楽科の本質を追究する「音楽づくり」の有効性 - 高知大学教育学部附属小学校の取り組みに着目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『音楽の授業づくりジャーナル』	6. 最初と最後の頁 pp.72-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 三村真弓	4. 巻 XL
2. 論文標題 国吉光徳保育園における「ふしづくり」システムに基づいた音楽リズムを中心とした表現 (音楽) の保育の特徴と意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『エリザベト音楽大学研究紀要』	6. 最初と最後の頁 pp.41-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 三村真弓・吉富功修	4. 巻 第67巻
2. 論文標題 高山短期大学附属幼稚園における「ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム」の特徴と意義 - 昭和60年度から平成2年度に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『教育学研究紀要 (CD-ROM版)』	6. 最初と最後の頁 pp.230-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三村真弓・坪能由紀子・金奎道・堀内知佐乃	4. 巻 第51巻第2号
2. 論文標題 学校教育における音楽の役割と意義 その1 - 高知大学教育学部附属小学校の「音楽づくり」に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『音楽教育学』	6. 最初と最後の頁 pp.80-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓	4. 巻 No.1238
2. 論文標題 質の高い音楽科教育に必要なものとは - 岐阜県古川小学校の「ふしづくりの教育」の特徴と意義に着目して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 pp.22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓	4. 巻 No.1239
2. 論文標題 主体的な創造活動を通して、音楽に対する他者の思いや意図に共感する態度を育てる音楽科授業	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 pp.38-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓	4. 巻 L
2. 論文標題 よこはまリズム研修会の「さくら・さくらんぼのリズムあそび」の特徴と成果 - 保育士の学びに着目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エリザベト音楽大学 研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.41-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓、吉富功修、緒方満、大西潤一、中峯悠太	4. 巻 32
2. 論文標題 「ふしづくりの教育」の実践 - 広島市立戸坂小学校における「リズム学習」を中心として -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽文化教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.5-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓	4. 巻 第67号
2. 論文標題 岐阜県古川小学校における「ふしづくりの教育」の教育課程に関する研究 - 二本立て方式に着目して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部	6. 最初と最後の頁 317-326
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓、吉富功修、岡田知也、長澤希、梅比良麻子、松下友紀	4. 巻 No.31
2. 論文標題 汎用的な資質・能力と音楽科固有の資質・能力との関連性 - 文部科学省研究開発指定校の取り組みを中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽文化教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 5-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松下友紀、吉富功修、三村真弓	4. 巻 No.31
2. 論文標題 特別支援学校 (肢体不自由) 高等部における「ふしづくりの教育」の実践 - 重複障害を有する生徒を対象とした音楽科授業での「わらべうたあそび」の検討を通して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽文化教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓、吉富功修	4. 巻 第64巻
2. 論文標題 高山短期大学附属幼稚園における「ふしづくりシステムによる幼児の音楽リズム」に関する研究 - 幼稚園開設当時の取り組みに着目して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育学研究紀要 (CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 340-345
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉富功修、三村真弓、福島さやか	4. 巻 第64巻
2. 論文標題 春日市泉ヶ丘幼稚園における「ふしあそび」の実践 - 古川小学校「ふしづくりの教育」の指導法に着目して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育学研究紀要 (CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 346-351
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪能由紀子、金奎道、松本進乃助、三村真弓、寺本妙子	4. 巻 第52巻第2号
2. 論文標題 学校教育における音楽科の役割と意義 その2 - SDGsと「誰にでもできる音楽づくり」 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 86-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓	4. 巻 No.9
2. 論文標題 特別支援学校における「誰にでもできる音楽づくり」の特徴と役割 - 東京都立葛飾特別支援学校 (知的障害) 高等部の山本恵美教師の取り組みを中心に -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 音楽の授業づくりジャーナル	6. 最初と最後の頁 採用決定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三村真弓	4. 巻 第68巻
2. 論文標題 よこはまりズム研修会の特徴 - 自主勉強会におけるリズム遊びに着目して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学研究紀要 (CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 425-430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 5件）

〔図書〕 計7件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山中文 (YAMANAKA Aya) (10210494)	椋山女学園大学・教育学部・教授 (33906)	
研究分担者	吉富 巧修 (YOSHITOMI Katsunobu) (20083389)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・名誉教授 (15401)	
研究分担者	北野 幸子 (KITANO Sachiko) (90309667)	神戸大学・人間発達環境学研究所・教授 (14501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------